

# 水泳授業における「個別最適な学びと協働的な学び」 についての一考察

## ー平泳ぎ習得に向けた学習プログラムの検討を中心にー

竹内 隆司<sup>1</sup>・村松 崇<sup>2</sup>

(1:東海学院大学, 2:長野市立篠ノ井西小学校)

### 要 約

令和3年(2021)1月に中央教育審議会より『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～の答申が為された。ここでは、今の学校教育課題への対応を「子どもの側に立ち、子どもを主語にする」という学ぶ側からの視点で捉え直し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通じて、全ての子どもたちの可能性を引き出すことが目指されている。

体育は運動・スポーツが中核となり、それらを行うのに必要な合理的な体の動かし方や運動の仕方である運動技術や戦術が、子どもの学習対象となる。その体育学習においても、これら2つの学びの具体を模索していくことが求められる。

「個別最適な学びと協働的な学び」は、どちらも学習(授業)方法論であるため、確実な学習成果を念頭にその過程が検討されるべきである。教師はこの方法論を採用することによって、子どもの学びを傍観することに終始するのではなく、その中で、必要且つ適切な指導・援助・助言を子どもたちに働きかけていくべきである。

本稿では、これまで体育授業で実践されてきた個人運動・集団運動の授業づくりを踏まえながら、子どもたちの技能保証を前提とする体育における「個別最適な学びと協働的な学び」について、小学校6年生の水泳運動・平泳ぎ習得に向けた学習プログラムを組み込んだ授業実践から得られたデータを示し、その成果の一端を報告した。

キーワード: 個別最適な学び, 協働的な学び, 体育学習, 平泳ぎ, 学習プログラム

### 1 はじめに

既に平成29年(2017)7月<sup>※高等学校は平成30年</sup>に示された学習指導要領解説冒頭の「改定の経緯」には、現在は予測困難な時代であると謳われている。これを受けて、令和3年(2021)1月に中央教育審議会より『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～の答申が為された。この答申では、今の学校教育課題への対応を「子どもの側に立ち、子どもを主語にする」という学ぶ側からの視点で捉え直し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通じて、全ての子どもたちの可能性を引き出すことが目指されている。

「個別最適な学び」とは、これまでも使用されてきた「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した用語であり、児童生徒が自己調整をして自分に合った学びを作りだしている、自律的な学習者の育成が重要視されていると

いう(溝上, 2021)。また、「協働的な学び」とは、個別最適な学びを推進する中で起こりうる、子どもの学習の孤立化を防ぐものとしての側面を示し、個別最適な学びを推進する上で欠かせないものとして強調されているという(中山, 2020)。文科省・初等中等教育局教育課程課(2021)からは「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」が公表されている(図1)。

体育は、すべての子どもたちが、生涯にわたって運動やスポーツに親しむのに必要な素養と健康・安全に生きていくのに必要な身体能力、知識などを身に付けることがねらいとされる(中教審, 2005)。具体的な学習場面においては、運動・スポーツを中核とし、それらを行うのに必要な合理的な体の動かし方や運動の仕方である運動技術や戦術が対象となって、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」といった能力としてバラ

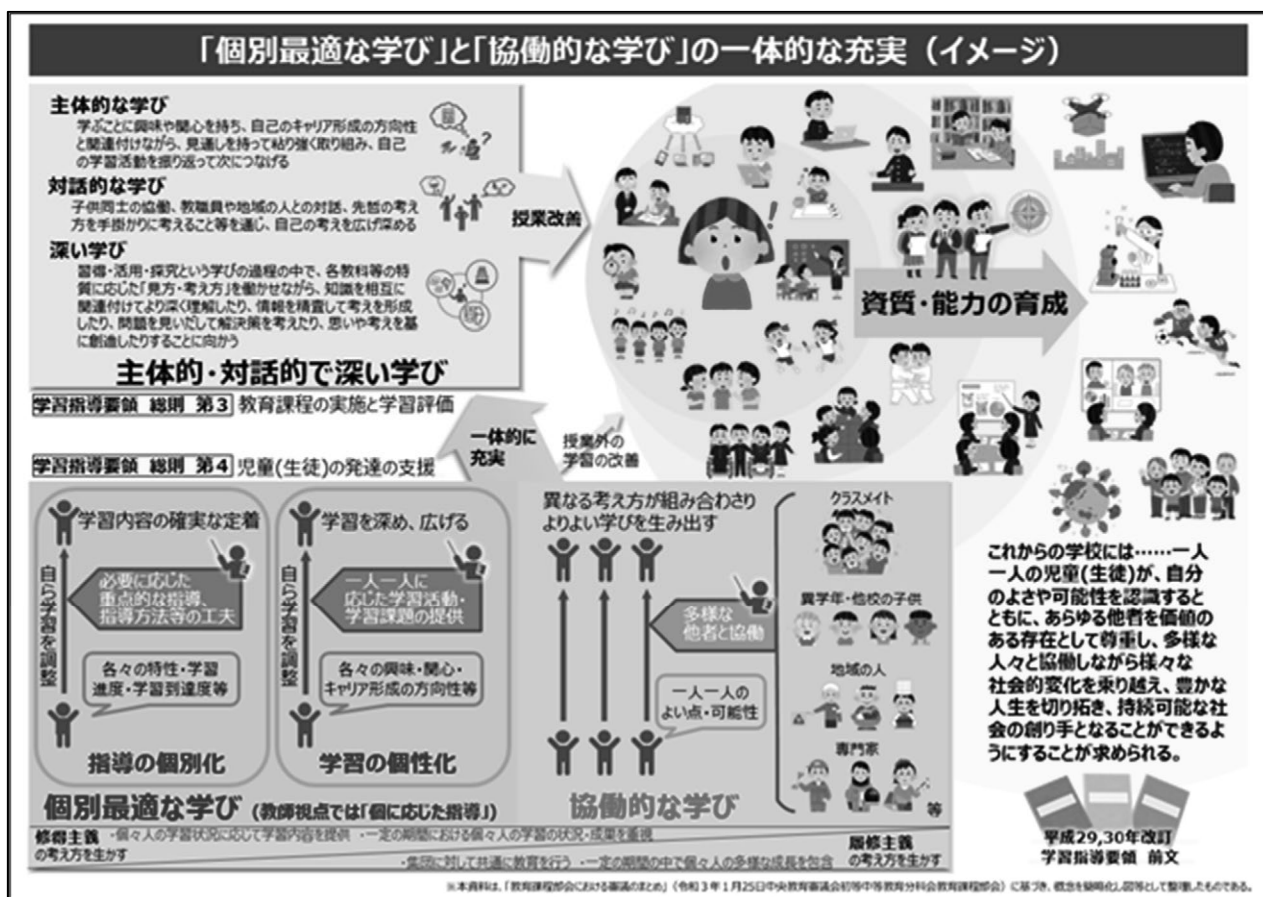


図1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のイメージ(文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2021)

ンスよく身に付けることが目指される(佐藤, 2011)。今回新たに示された2つの学びの姿については、この体育学習においても、その具体を模索していくことが求められる。

本稿では、これまで体育授業で実践されてきた個人運動・集団運動における授業づくりを踏まえ、子どもたちの技能保証を前提とした体育における「個別最適な学びと協働的な学び」の一端を顕すため、小学校6年生の水泳運動・平泳ぎ習得に向けた授業実践から得られたデータを示すことを目的とする。

## 2 体育における「個別最適な学びと協働的な学び」とは

### (1) 個別最適な学びと協働的な学びの概念整理

繰り返しになるが、「個別最適な学び」とは、これまでも学習指導要領において位置づけられてきた、個に応じた指導を学習者の視点から整理した概念である。ここでは、指導の個別化と学習の個性化の二つに整理し、子どもが学習の進捗や方法などを自己調整しながら学習を進めていけるように指導する必要性が示されている(表1)。

上記の学びが着実に展開されるように、これまで以上に子どもの学習状況を細かく捉えることに努め、きめ細

表1 個別最適な学びの内的要素(中教審答申概要, 2021 をもとに、筆者が整理)

	指導の個別化	学習の個性化
目標	・基礎的・基本的な知識技能等の習得 ・思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等の育成	・子供自身が学習が最適となるよう調整
方法	・支援が必要な子供により重点的な指導を行い、効果的な指導を実現する。 ・特性や学習進捗等に応じ、指導方法や教材等の柔軟な提供・設定を行う。	・子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。

かく指導・助言することや ICT を使って学習履歴(スタディ・ログ)や生徒指導上のデータ等の活用が重要であるとされている(中教審, 2021)。

一方で、「協働的な学び」は他者の考え方に触れながら学びを深めていく学習スタイルであり、学習指導要領に掲げられた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「個別最適な学び」と連動することで、その効果が発揮されるという。AI 技術が高度に発達する Society5.0 時代の中で、知・徳・体を一体的に育むためにさまざまなリアルな場面(実習や実験, 地域活動など)を、異学年間や他校の子どもも含め、他者と協働しながら経験することの重要性が強調されている。ここでは、集団のなかで個が埋もれてしまわないように、子ども一人一人のよい点や可能性を生かすことで異なる考え方の組み合わせを促し、よりよい学びが生み出されるようにすることが求められている。

## (2) 体育科教育における研究報告の状況

「令和の日本型学校教育」が公表されて2年あまり、これまでに体育科教育においても、個別最適な学び・協働的な学びについての研究論文が、徐々に発表されている。

「個別最適な学び」に関わっては、学校現場における研究実践も含め、ICT 機器を活用した個別最適な学びを模索するものが多数を占める。

河田・山口(2022)は、小学校第4学年の跳び箱運動の授業に際し、1人1台のタブレット端末を用いて手本動画を活用したり、仲間に動画撮影してもらった自己の運動をシンキングツールによって活用したりする実践を報告している。また、助成を受けて研究を推進した零の会(2022)は、持久走などに取り組む子どもたちの心拍数を可視化するために、ハートレートモニターを使った実践を報告している。これらは、コロナ禍におけるオンライン学習の構築によって加速した GIGA スクール構想の影響が大きいと思われる。

「協働的な学び」に関わっては、子どもたちの「協働の仕方」に着目した研究報告が散見される。

西川(2021)は、「運動の可視化・イメージ化」「児童・生徒の学びに沿ったグループメンバー構成」「児童・生徒間の運動にかかわる対話の重視」「わかるとできるを関連づける『考える』学習」の4点を、協働的な学びの特徴として導き出している。そして、松本・近藤(2021)は、学習

者の行動に着目し、授業單元における対象児童らの対話及び社会的スキルの実態の変容を報告している。

また、若林・岡野・加納(2022)は、小学校3年生のネット型ボールゲームの実践における協働的な学びの中で、ゲーム様相の発達に関わって、プレイ中のハラハラ・ドキドキ感などを共有し合う情動のかかわりを基底とし、味方プレイヤーの意図の推測や共有・対戦相手とのさぐり合いといった認知的かかわりが、立ち現われてくると述べている。子どもたちのかかわりが、情動のかかわりと認知的かかわりの双方が質的に変容したことから、このかかわりの発達過程がボールゲームの学びの深まりとしている。

ここでは、子どもに相応の教材が用意されていたことが想像されるものの、ゲームの発達過程を子どものかかわり(態度)的側面を中心に捉えていることが、指摘される。

## (3) 運動・スポーツを学ぶ体育における

### 「個別最適な学びと協働的な学び」とは

現在、運動・スポーツを教科内容とする体育学習の「個別最適な学びと協働的な学び」の在り方についての検証が、体育科研究の分野において進められている。

しかし、「令和の日本型教育」が示される以前から体育(各教科)においては、個に応じた指導・協同した学習のどちらも行われてきたという実績がある。

例えば有賀・岩田・中島・駒村(2019)は、小学校における協働的な学びを生み出す授業を探究するにあたり、子どもたちに、わかりやすくやさしいゴール型ゲーム「ラダーコート・サッカー」を提供している。ここでは、ゲームの課題解決に必要な認識学習を促すゲーム記録を工夫し、それぞれのチームが自分たちの実態・課題・方法認識に結びつけたかたちで、極めて目的意識的に運動の課題解決に向けた学習活動が行われたと、報告されている。

日本では、「協働」という用語は、1990年代初め頃には地方自治の世界で使われ始めたが、教育学では2000年代に入るまでほとんど使用されることはなかったと考えられる。現在は、中教審・文科省主導の下で「協働」が積極的に使用されているが、体育科教育学においては、この状況が発現する前から「協同」的な学習についての研究が積み重ねられてきた。

協同学習については、古くは1900年初頭にはその理論研究が存在するなど、1980年代以降の学校教育にあっ

でも価値のある学習方法として位置づけられてきた。坂本(2008)は、ジョンソン兄弟(Johnson&Johnson)の理論をもとに、協同学習について次のように説明している。それは「受動的で競争的な学習を主体的で協力を中心としたものに変える革新的な学習方法である」というものである。とかく技能や経験といった個人差を考慮しつつ、他者との関係性を重視して行われる体育学習においては、まさにうってつけの学習であるといえるだろう。

友野(2016)は坂本の論考をもとに、「協働学習」は異質な他者と関係を結び、共通の目標や課題に向けて関係を構築していく学習であると説明している。このように、「協働」の意味について深く言及した場合、厳密には「協同」とは区分される。それは、「協同学習」はメンバーが同質的な役割を持ち、課題に効率よく取り組む学習であると説明されるからである。しかし、本稿ではこれまでの研究実践の成果を尊重し、「協同」の学びが深化統合されていくことで「協働」の学びに変容していくという立場で論を進めたいと思う。つまり、体育科教育における先行研究で使用されてきた「協同」の理念は「協働」と凡そ同義であったと判断したい。

その中で、栗田(2018)が、協同学習について「異なる特性や背景を持った学習者が小集団で学習をすることによって得られる恩恵を、安定化・最大化するための授業方法論」と定義している点に注目したい。この授業方法論という考え方については、過去の事例を参考にして、払うべき注意点が存在していることに触れておきたい。

かつて標榜された「めあて学習」という授業方法論に対して、三木(2003)は次のような事柄を問題視したことがある。それは、教師は客観的な練習の手順を子どもたちに示し、それを管理するための授業マネジメント能力が求められる一方で、覚えるのは子ども自身であるから自得以外に道はないとして傍観者の態度が取られていたという点についてである。つまり、技術ポイントとその手順を示すなどの「学習活動を効果的にマネジメントする学習指導」と、「運動感覚的な動きを覚えさせるための学習指導」との区別がついていないことを指摘していたのである。

現在、求められている「個別最適な学びと協働的な学び」に関しても、これと同じ思考が求められる。つまり、「個別最適な学び・協働的な学び」とは、どちらも学習(授業)方法論であって、確実な学習成果を念頭にその過程が検討されるべきであろう。西川は、「協働的な学び」を通じて運動能力・体力の向上、他者と課題解決に向け

て協力して取り組む力、児童・生徒のよりよい人間関係の形成に成果がもたらされると述べている。また、有賀らは、子どもの技能学習が自得の世界に陥らぬように、やさしい教材づくりを図り、その教材の課題性に結びついた学習過程を工夫することによって、協働的な学習の実現に、有効性を発揮したと報告している。

図1の「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」にあるように、実際の授業づくりにあたっては、それぞれの要素が組み合わさって実現されることが多く、お互いの成果が還元し合っていることを意識する必要がある。これまでに発表されてきた論考からは、体育の技能習得の側面を強調した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な構築についての報告が少ないことから、次節以降、その在り方の一案を事例的に示したいと思う。

### 3 技能習得に向けた水泳運動の「個別最適な学びと協働的な学び」に向けて

#### (1) 小学校段階の水遊び・水泳運動の学習内容

小学校学習指導要領(文科省, 2017)では、水泳の学習に関わって表2のように、領域名と内容の構成が示されている。

表2 小学校学習指導要領の水泳運動の領域と内容構成

	領域名	内 容
低学年	水遊び	「水の中を移動する運動遊び」 「もぐる・浮く運動遊び」
中学年	水泳運動	「浮いて進む運動」 「もぐる・浮く運動」
高学年	水泳運動	「クロール」「平泳ぎ」 「安全確保につながる運動」

この中で低・中学年には「もぐる・浮く運動遊び」が位置づけられ、泳法の細かな技術指導ではなく、水に対する感覚や水中での身のこなし方を身に付ける(浜上, 2018)段階であると、理解することが求められる。また、これまで泳法習得が中心だった高学年に「安全確保につながる運動」が加えられたことは興味深く、水難事故等の安全教育が導入の背景にあることが推察されるが、ここで強調される「浮くこと」等を通じて、安定した呼吸を身に付けるという内容は、高学年にあっても「浮くこと」の重要性が再認識されたためであると考えられる。それまで中学年は「浮く・泳ぐ運動」(文科省, 2008)と示されてきたが、今回の学習指導要領では「水泳運動」という領域

名に変更されている。これは、「浮くこと」と「泳ぐこと」が分離して捉らえてしまう状況を改善するために、両者の関連を顕在化させるねらいの名称変更であったと言える(高田, 2017)。

## (2) 平泳ぎ習得に向けた学習プログラムの構想について

### ①平泳ぎの習得方法についての検討

本研究実践では、6年生の平泳ぎをメインに授業を展開する。他の泳法に比べ、かえる足と言われる「キック」・ストローク-息継ぎ-キックの「タイミング」等、運動の課題性が高いため、認識力が発達してくる6年生での学習効果を期待している。その学習構想については、これまでの先行研究を参考にする(竹内, 2021)。

その概要は以下の通りである。

キック=かえる足は、足のW字と親指を外側に向けたフックの形から、水を踝で挟むようにして、足の内側で水を捉える感覚と動きを身に付ける。ストロークは、手の動きを確認し、歩きながら水の中で動きと感覚をつかみ、息継ぎも合わせて学習する。

タイミングは「のびて-かいて-けて」というリズムの繰り返しであることを指導する。ドリルメニューの「コンビネーション」で、壁に向かい「縮んで-伸びて」という動きを行い、「縮んで」の時にかえる足の準備と息継ぎを、「伸びて」でかえる足キック-けのび姿勢をとる。これにストロークをつけていく。陸上や水の中の両方で、繰り返し確認する。

やはり重要になるのは、リラックスした状態のけのびである。浮けることで、水の中でストローク・息継ぎ・キックをする余裕が生まれ、より易しく泳ぐ学習ができるからである。

### ②技能習得を支えるドリル学習の設定

水の中での運動時間の確保と、指導の効率化を図るために、水慣れ・ドリル学習・平泳ぎ習得に向けた学習過程を、協働的な学びを視野にグループで行うことにする。その中で、個別最適な学びを視野に入れて、体をリラックスさせた状態で浮く・泳ぐ動きや感覚を養うことを企図し、子ども一人一人にどの方法が効果を発揮するのかを見極めながら、ドリルメニューを厳選するようにする。特に、浮く感覚を基礎としてクロールと平泳ぎの習得に向けた、段階的な運動を取り入れるようにするなど、このドリルを起点とした本格的な泳法の学習を展開する。

## 4 授業実践データおよび学習成果の検討

### (1) 授業実践校・実践期間及び単元計画について

授業実践校・実践期間および単元計画については、以下のようであった。

- ・授業実践校：N市立S小学校6年生  
31名(男子15名・女子16名)
- ・実践期間：2023年6月～7月(全8時間)

単元は全8時間で構成した。児童のほとんどが水泳運動の授業を大変楽しみにしており、その期待感を損なわないように留意した授業づくりに力点を置いた。クロールについては5年生の時に重点的に扱ったが、平泳ぎについては全く学習機会がもたれなかった。そこで、6年生において、その行い方を知るとともにその習得をめざし、単元の目標を「平泳ぎで続けて長く泳げるようになる」と設定し、授業を展開した。

既述の通り、学習の効率化の観点に沿って、水慣れからグループ学習を展開する。事前アンケートを参考に、クロールにおいて25m泳げる児童・泳げない児童の混成グループを構成した。また、平泳ぎ習得の追究場面では、技能習得を保障した個別最適な学びを念頭に置き、続けて長く泳げるようになるまでの道筋を、「キック」「ストロークと呼吸」「ストロークとキックのタイミング」とし、以下のようにそれぞれステップ1～3という形で示した。

#### ステップ1：キック

- ①陸上でのチェック
- ②プールサイドに腰かけて
- ③壁につかまって
- ④仰向けキック(ビート板をもって)
- ⑤うつ伏せキック(ビート板をもって)
- ⑥気を付けキック

#### ステップ2：ストロークと呼吸

- ①腕のかき(陸上で)
- ②歩きながら腕をかく
- ③呼吸のタイミング
- ④補助付きで呼吸練習

#### ステップ3：ストロークとキックのタイミング

- ①腕と足のタイミングを合わせる
- ②2回キック1回プル
- ③1回キック1回プル

## 水泳授業における「個別最適な学びと協働的な学び」についての一考察

このステップ 1～3 の道筋の中から、子どもたち自身にとって個別最適なものを選択し、グループ内でアドバイスし合うことを通して、協働的な学びと一体化を図りたいと考えた。その単元展開は表 4 に、1 時間の授業の時間運用は表 5 に示したとおりである。

表 4 本実践の単元展開

1	オリエンテーション・自分の実力の把握
2	ドリルの説明→体験
3	平泳ぎで続けて長く泳ぐための道筋の提示
4	追究①
5	追究②
6	技能チェック①
7	課題別練習
8	技能チェック②

表 5 1 時間の授業の流れ

0	15	35	40
着替え 準備体操・ドリル	追究	振り返り	着替え

準備体操時に、陸上で「クロールの手のかき・息継ぎ・平泳ぎのタイミング・足の動き」とともに、プールサイドでの入水直前に、在位姿勢における平泳ぎの足の動きを確認し、入水後は、ポビングを取り入れている。また、その後に行うドリルメニューは、以下の通りである。

### ドリルメニュー

- ①浮く運動（くらげ、伏し、大の字、だるま(図 2)、連続だるま、背うき)
- ②腕伸ばしバタ足 20 回、壁クロール 20 回、かえる足 10 回(図 3)、壁平泳ぎ 10 回
- ③けのび(図 4)→クロールで戻る。(繰り返す)



図 2 グループ・だるま浮きドリルの様子



図 3 グループ・カエル足ドリルの様子



図 4 グループ・けのびドリルの様子

## (2) 学習成果の検討

### ①実践授業前後の技能評価における変化について

本研究における学習プログラムの実践前後に、授業実践者である著者の一人である村松が、実際に泳法チェックを行い、子どもたちの平泳ぎにおける技能レベル評価を実施した。平泳ぎにおける技能評価レベルについては 4 段階で示すことにし、評価に向けた技能レベルの基準は、以下のように設定した。

「技能レベル 1」：けのびができていない

「技能レベル 2」：けのびはできているが、キックとキック・ストロークのタイミングができていない

「技能レベル 3」：けのび・キックはできているが、タイミングができていない

「技能レベル 4」：けのび・キック・キック・ストロークのタイミングができている

実践前後の技能習得レベルの評価は、表 6・図 5 の通りである。尚、実践クラスは 31 人在籍しているが、本実践においてデータが取れた児童数は 29 人となっている。

表6 実践前後の技能習得レベル

技能レベル	実践前 (人)	実践後 (人)
1	11	0
2	9	11
3	4	3
4	5	15

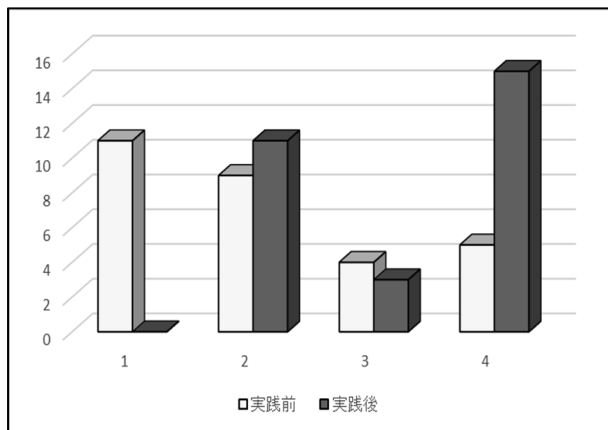


図5 実践前後の技能習得レベル

実践前、技能レベル1・2と評価された児童はクラスの半数以上に上ったが、実践後には減少傾向を示した。また、「平泳ぎを習得した・若干の課題を残しながらも概ね習得した」技能レベル3・4の児童は倍加し、特に実践後のレベル4の児童は3倍に増加している。

また、実践前後における評価レベルのスコア(1~4)の平均は、表7の通りである。実践前の評価レベル1・2を下位群、評価レベル3・4を上位群として示している。また、その結果はt検定によって、その有意性を検討している。

表7 実践前後の評価スコアの変化

技能レベル	実践前スコア	実践後スコア	
下位群	1.45	2.47	* 有意性
上位群	3.56	4	* 有意性
全体	2.1	3.14	* 有意性

※ n = 29

\*: p 値 &lt; 0.05

実践前後における評価レベルのスコア平均の変化を見ると、上位群・下位群ともに増加しており、全体も含めて有意な増加(妥当な p 値 < 0.05)が見られた。これは、ステップ1~3の学習の道筋とドリル学習を含めた、本実践における学習プログラムの総体から導き出されたデータとして判断することができるだろう。

## ②児童の実践に関わる意識調査の結果について

この研究実践終了後、実践に参加した児童を対象にアンケート調査を実施した。主な質問項目としては、「平泳ぎが泳げるようになるために役に立つと思う(思った)練習メニューを書き出してください」というものであった。

そこから導き出された練習メニューと、それを有効であったと考えた児童数を、表8にまとめている。

表8 児童が役立ったと考えた練習メニュー

練習メニュー	
・壁かえる足	11人
・ビート板でかえる足	7人
・壁コンビネーション	6人
・けのび	3人
・歩きストローク	1人
・陸上練習	1人

この結果から、今回、用意された学習プログラムのいずれかが、児童一人一人にとって最適なものとなっていたことがうかがえる。特に、大多数の児童が「壁に捕まっただのかえる足」が有効であったと答えている。その他、ビート板を使ったかえる足を含めると、クラスの大半の児童がこの段階の学習状況にあったことがわかる。実践後の習得レベルに目を向けると、クラスの半数以上が平泳ぎという泳法習得の途上で、学習を終えていることが確認できる。このことから、平泳ぎの習得過程においては、子どもたちにとって「かえる足」というキックの学習の重要性が改めて浮き彫りになったといえる。また、先行実践(竹内・2021・岩田・2012)に準えた時には、キックについては所謂「あおり足」の発生に対処していく必要があり、今後はその対処に留意することが求められるだろう。また、「ストローク」や「息継ぎ」、「ストローク・息継ぎ・キックのタイミング」を課題としていく学習過程が踏まれていくことが予想される。

その他、着目したいのは「けのび」の有効性を実感している児童であり、「浮けること」で水中におけるストローク・息継ぎ・キックといった動作ができそうだという感覚をもつことができたことが、想像される。

自由記述の欄には「友達と」「グループで」学習したことで、水泳授業が「楽しかった」「好きになった・もっと好きになった」「5年生の時よりも上手になった」という回答が目立った。これは、グループにおいて協動的な学びの

実現を追究したことによって得られた、子どもたちの意識形成の結果ではないかと思われる。

## 5 おわりに

木原(2016)は、教師の力量形成を「教師が、各自が直面する『固有』な成長課題に立ち向かい、『自律的』『主体的』に課題を解決しようと格闘する過程」であると述べている。

今回の研究実践を終えた時、第2著者の村松は次のように振り返っている。

「平泳ぎ指導のあり方がよくわかり、加えて、自分の至らなさも感じた。『来年、もっとこうしたい』という思いが出てきたので、大変実りのある実践であった。」

目の前の、子どもたちのために「よい授業を提供したい、力をつけてあげたい、できたーわかったという喜びを味わってもらいたい」という願いは教師共通のものであり、普遍的な授業研究の推進に向かう原動力といえる。教師自身が、授業実践の中から得た実際の知見と自身の課題は、その後のよりよい授業づくり・指導力形成に役立っていくものと考えられる。

この方向性と並行して、子どもたちの技能保証を前提とした体育における「個別最適な学びと協働的な学び」の実現を求め、水泳運動の平泳ぎ習得に向けた学習プログラムの検討を図った。ここまでの報告を通じて、その成果の一端を顕すことができたと思われる。特に、「協働的な学び」に関わっては、日々子どもたちが書き記している日記において、その可能性を大いに感じさせる内容が多く残されていた。このことを最後に示し、本稿の結びとしたい。

### 【子どもの日記より】

「今日は、体育で水泳がありました。でも、今日の水泳は、いつもと違うやり方でやりました。グループでやることです。グループでやったらスムーズにあって良かったです。グループのみんなで協力しながら、小学校生活最後の水泳なので、平泳ぎができるようになりたいです。」

「今日は、体育 水泳ラストでした。最初は、平泳ぎができませんでした。でも、この1年で泳げるようにな

りました。最初、平泳ぎは特に泳げませんでした。だけど、友達がたくさんコツを教えてくださいました。最後の水泳は楽しかったです。」

## 参考文献

溝上慎一(2021) 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を基礎にして「個別最適な学び」「協働的な学び」へ、教育最前線 第8号:3-5

中山和幸(2020) 子どもの自己調整の場面を生む個別最適な学びと協働的な学びの実現～総合的な学習の時間における自由選択学習の導入とICT機器及びシンキングツールの活用～、和歌山大学教育学部附属小学校紀要 44巻.PP.112-119

中央教育審議会(2005) 健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会これまでの審議の状況―すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは?―、初等中等教育分科会・教育課程部会「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会

佐藤 豊・友添秀則(2011) 楽しい体育理論授業をつくろう、大修館書店.P36

中央教育審議会(2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)【概要】、中教審 第228号.P1 河田翔太・山口孝治(2022) 小学校体育授業におけるタブレット端末活用の効果―個別最適な学びを探る―、佛教大学教育学部学会紀要 第22号.PP.129-137

雫の会(2022) 体育授業における個別最適な学びの実現、パナソニック教育財団実践研究助成 研究成果報告書.PP.1-6

西川 潔(2021) 体育科教育において協働的な学びを構成する授業づくりに関する文献的検討、関西福祉科学大学紀要 第25号.PP.29-43

松本健太・近藤智靖(2021) 小学校体育授業における協同学習に関する研究:児童の対話に着目して、運動とスポーツの科学 第26巻 第2号.PP.137-148

若林徳亮・岡野 昇・加納岳拓(2022) 体育の協働的な学びに



- おけるボールゲームの発達過程：ネット型ゲームの実践事例を通して，三重大学教育学部研究紀要 第73巻 教育実践.PP.351-361
- 坂本 旬(2008) 「協働学習」とは何か，生涯学習とキャリアデザイン 5巻.PP.49-57
- 友野清文(2016) Cooperative learningとCollaborative learning, 国際学科特集 No.907:3
- 栗田昇平(2018) 体育授業における協同学習の効果的な適用を促す授業手続き：協同学習の代表的な4つのアプローチの統合を通じて，神戸医療福祉大学紀要 第19巻 第1号.PP.43-55
- 三木四郎(2003) 学校体育における技能教育の空洞化，伝承 第3巻.PP.29-42
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課(2021) 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料.P38
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 体育編. 東洋館出版
- 浜上洋平(2018) 水泳運動系領域，初等体育授業づくり入門，大修館書店. PP.118-119
- 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版
- 高田彬成，Q&A で理解する「水泳領域の改訂のねらい」，2017，体育科教育 65(8):14
- 竹内隆司(2021 小学校における水泳) 学習指導の系統モデルについての提案—け伸びを軸とした泳法習得までの学習過程の報告を通して—，松本大学教育改善実践賞優秀論文集
- 岩田 靖 (2012) 体育の教材を創る，大修館書店.PP.117-126
- 木原成一郎・林 俊雄・大後戸一樹(2016) 授業の力量形成に関するライフヒストリー研究—A氏の体育授業を中心に—，学校教育実践学研究 第22巻.PP.217-227

A Consideration of “Individual Optimal Learning” and “Collaborative Learning” in Swimming Lessons — Focusing on Study Programs for Mastering Breaststroke —

TAKEUCHI Takashi  
and MURAMATSU Takashi

